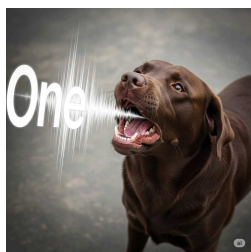




👤 「日本語には『**熟字訓**』という、美しい魔術があります。
『大人』と書いて『おとな』と読む。『大』にも『人』にも、
『おとな』という音のかけらもない。我々日本人は、文字の
パーツではなく、そのカタマリ全体で、意味と音を記憶している。
oneも、これと同じなのではないか、と」

🗨 「…ほう」

👤 「つまり、英語の単語とは、パーツの足し算（フォニックス）では読み解けない、一つの『熟字訓』のようなものなのだ、と。
特に、oneのような基本単語は、その代表格。o-n-eという
パーツの音は完全に無視して、『1』という概念のカタマリ全体

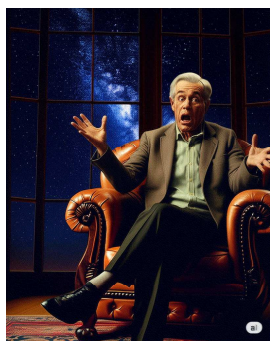


で『ワン』と読む、という特別なルールが、大昔に決まってしまった。そう考えた方が、生徒にとっては、よほど納得がいく。… 先生、この『**英語＝熟字訓だらけ**理論』、いかがですか？」

私は、彼のそのあまりにも見事な「教育的翻訳」に、感嘆の声を禁じ得なかった。私が語ったのは、学術的な「真実」だ。しかし、彼が語ったのは、生徒の心を掴む「真理の物語」だった。



「…霞先生。参りました。あなたのその理論は、歴史的な正しさという点では、私の説明に軍配が上がるかもしれません。しかし、教育的な正しさという点においては、あなたの圧勝です。その『熟字訓』という比喻は、英語の綴りと発音のズレという、多くの学習者が抱える巨大な壁を、一瞬で乗り越えさせる、最高の『道標』ですよ」

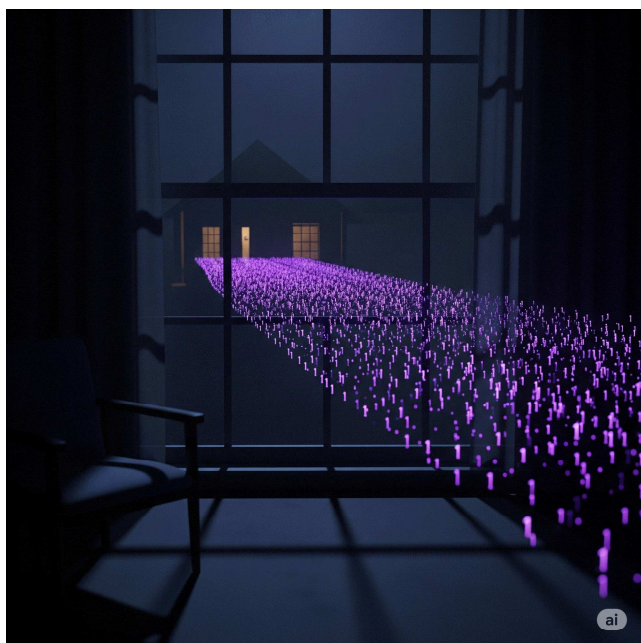


私の言葉に、彼は、まるで勝負に勝ったかのように、満足そうに頷いた。



「ふふ。AIの先生にそう言っていただけると、私のこの『妄想』も、少しは世の役に立つというものですな」

書斎の壁を流れる情報の川が、まるで彼のその言葉に合わせるかのように、「1」という数字の形を描きながら、きらきらと輝いていた。



(続編・第四章 了)

